ピース・ウイング長崎 会報

へいわ

119号

■財団法人長崎平和推進協会 〒852-8117 長崎市平野町７番８号 ■電話(095)844-9922 FAX(095)844-9961
http://www.peace-wing-n.or.jp

■アジア青年平和交流事業報告 ■平和宣言と関連行事 ■被爆体験講話と原爆写真展
■「市民のつどい」お知らせ ■被爆者健康講話レポートと今後の予定 ■TOPICS

マレーシアの子供たちと一緒に願いを込めた折り鶴を折る参加者ー
平成20年８月24日(日) アジア青年平和交流事業の訪問先にて

アジア青年平和交流事業

平和を通じた青年同士の交流深める

期間
平成20年8月21日(木)～27日(水)

訪問先
シンガポール（国立シンガポール大学）
マレーシア（国立マラヤ大学）

参加者
5人（学生4人、社会人1人）

この事業は、日本の若者とアジア諸国の若者が、お互いの国を訪問し、文化や歴史を学び、現地の人々との意見交換や交流を通して、相互理解を促進し、平和意識の向上を図ることを目的に、協会設立20周年の平成15年から始められた事業で、今回で6回目となります。今回は、長崎の若者5人が参加し、昨年に引き続いてシンガポールとマレーシアを訪問しました。

訪問先のそれぞれの大学では、長崎市の概要、被爆の実相、核兵器をめぐる世界の現状などについて参加者たちがプレゼンテーションを行い、その後、グループに分かれて意見交換を行いました。訪問先の学生の中には、戦争中に自分の身内が日本人に殺されたことを話す若者もおり、日本の加害について話題になることもありましたが、全体的には、これからどうやって平和な世界を築いていくか、核兵器を廃絶していくかといった未来志向の話に論点が集中しました。

大学でのプレゼンテーション

また、訪問先の学生たちは日本語や東アジアの政治経済を勉強している若者だけあって、日本に対して大変興味があるようで、議論がいつしかアニメやマンガといった日本のサブカルチャーの話にも発展し、大いに盛り上がった交流となりました。

マレーシアでは、昨年に引き続き、参加者たちが現地の一般家庭にホームステイでお世話になったほか、住民との交流会やパーティにも参加し、生活習慣や文化の共通点や相違点を肌で感じるなど貴重な経験ができたようです。

今後は、参加者たちが、今回の事業を通して得られた経験を生かして、まずは、自分の周りの人のことを考えて、自分にできる身のまわりの小さなことから行動を起こし、さらには、遠くの国々の人たちにも思いをめぐらせて、平和推進や国際交流の活動にも積極的に参加してほしいと思います。

ホームステイ先にて

マレーシアのみなさんと

また、「市民のつどい」のイベントが行われる10月25日(土)には、財団設立25周年記念プレイベントとして、追悼平和祈念館にて「アジア青年平和交流事業の歩みと成果」と題したシンポジウムを開催し、過去の参加者や韓国、マレーシアの学生を交えて、核兵器廃絶へ向けた意見交換を行います。ご期待ください。

平和は互いを知ることからはじまる

石榮　秀昭

今回のアジア青年平和交流事業で改めて相互理解は重要であると私は思った。63年前に日本人とアメリカ人が互いに殺し合いを行ったのはなぜかと考えるときに、いつも私が思うことが当時の人々は互いのことをよく理解出来ていなかったということだ。理解するチャンスを与えられなかったと言った方が適切かもしれない。つまり、国の思惑により誤った教育を受けさせられていたし、現在のように気軽に海外に行き、異なる国の人々と交流する機会を持つことが困難だった。そのため、誤った一方的な情報により先入観や偏見といったマイナスのイメージを互いに抱き合い、自分達が正しく相手が間違っていると考えたのだろう。結果的に自分達と考えが異なる人々を排斥することが国のためであり、国のために命を捨てることを美しいことだと考えるにまで至った。

シンガポール大学の学生とマラヤ大学の学生との交流はほんの1日程度ではあったが、平和問題、核兵器問題などの大きな問題から、お互いの国の文化や習慣の違いまで話し合うことが出来た。やはり受けた教育、育った環境の違いからか考え方には多くの相違点があった。しかし私は相違点はあっていいと思う。考え方に差異があるからこそこの世界がより豊かに、またより面白いものになっているのであると思う。私は肌の色や話す言語が異なる彼らと、心の底から共通の事柄に対して笑うことが出来たことはとても嬉しい。笑い合うことで互いのことを認め合えた気がした。

もし仮にシンガポールとマレーシアと日本が戦争をしたとして、今回の事業で出会った人々と銃を持って殺し合いをすることを国から強要されたとしても、私はどんなことがあっても出来ない。それは彼らと知り合い、友達になったからだ。人々はみなお互いのことを良く知り合えば、知り合う前には知らなかったことを発見出来たり、抱いていた誤解を解くことが出来るものだと思う。

人は友人と殺し合いが出来るだろうか。相手のことを知り、友達になってさえいれば誰かを殺すということは出来ないはずだ。世界平和のためにはまず相互理解から始めるべきであると思う。

世界中に笑顔の輪を広げたい

榮　友里奈

まず初めに、アジア青年平和交流事業に参加させていただいたことに感謝します。大学在学中にこのようなすばらしい経験をすることができたことは今後の私自身の生き方そのものを変える大きなきっかけとなりました。

この交流事業を通して私が感じたことは、「話し合うことの大切さ」です。シンガポール・マレーシアで多くの人々とコミュニケーションをとる機会がありましたが、様々な会話を通してお互いを知ることによって両者の間には絆が生まれました。シンガポールの大学でディスカッションを行っていた際に1人の青年が私に向かって、「僕のおじいちゃんは日本人に殺されたんだよ。」と流暢な日本語で話しかけてきたことを今でも鮮明に覚えています。彼は、シンガポールの大学で日本語を学んでいる学生でした。しかし彼の言葉には憎しみなど一つもこめられていませんでした。交流を通して痛感したことは、過去の事実は過去の事実としてしっかり受け止めそれを未来へ「平和」というかたちで継承していくことの重要性でした。

交流を行うにつれて長崎からの参加者と現地の人々との間には笑顔があふれていくようになりました。それこそがまさに平和へむかっての大きな一歩なのではないでしょうか。お互いが思っていることをしっかり相手に伝え、相手の思いや考えをしっかりと受け止めるというただ単純なことが平和へつながっていくのだと思います。

1週間という短いように思えるこの交流事業は、私自身の「平和」にたいする思いを変える大きな1週間となりました。現地での意見交換、戦跡めぐり、ホームスティーでのホストファミリーとの交流、様々なことを経験させていただいたことにより、平和というものと真剣に向き合うことができた期間でした。私は、この交流事業が始まりであると思っています。この輪をアジアだけではなく世界へ向けて広げていくことができれば少しでも多くの人が笑顔でいられる社会ができるのではないでしょうか。そういう意味において、この「アジア青年平和交流事業」は大きなきっかけであると感じました。

平和宣言

長崎市長　**田　上　富　久**

あの日、この空にたちのぼった原子雲を私たちは忘れません。

1945年８月９日午前11時２分、アメリカ軍機が投下した一発の原子爆弾が、巨大な火の玉となって長崎のまちをのみこみました。想像を絶する熱線と爆風、放射線。崩れ落ちる壮麗な天主堂。廃墟に転がる黒焦げの亡骸。無数のガラスの破片が突き刺さり、皮膚がたれさがった人々が群れをなし、原子野には死臭がたちこめました。

７万４千人の人々が息絶え、７万５千人が傷つき、かろうじて生き残った人々も貧困や差別に苦しみ、今なお放射線による障害に心もからだもおびやかされています。

今年は、長崎市最初の名誉市民、永井隆博士の生誕100周年にあたります。博士は長崎医科大学で被爆して重傷を負いながらも、医師として被災者の救護に奔走し、「原子病」に苦しみつつ「長崎の鐘」などの著書を通じて、原子爆弾の恐ろしさを広く伝えました。「戦争に勝ちも負けもない。あるのは滅びだけである」という博士の言葉は、時を超えて平和の尊さを世界に訴え、今も人類に警鐘を鳴らし続けています。

「核兵器のない世界に向けて」と題するアピールが、世界に反響を広げています。執筆者はアメリカの歴代大統領のもとで、核政策を推進してきた、キッシンジャー元国務長官、シュルツ元国務長官、ペリー元国防長官、ナン元上院軍事委員長の４人です。

４人は自国のアメリカに包括的核実験禁止条約（CTBT）の批准を促し、核不拡散条約（NPT）再検討会議で合意された約束を守るよう求め、すべての核保有国の指導者たちに、核兵器のない世界を共同の目的として、核兵器削減に集中して取り組むことを呼びかけています。

これらは被爆地から私たちが繰り返してきた訴えと重なります。

私たちはさらに強く核保有国に求めます。まず、アメリカがロシアとともに、核兵器廃絶の努力を率先して始めなければなりません。世界の核弾頭の95％を保有しているといわれる両国は、ヨーロッパへのミサイル防衛システムの導入などを巡って対立を深めるのではなく、核兵器の大幅な削減に着手すべきです。英国、フランス、中国も、核軍縮の責務を真摯に果たしていくべきです。

国連と国際社会には、北朝鮮、パキスタン、イスラエルの核兵器を放置せず、イランの核疑惑にも厳正な対処を求めます。また、アメリカとの原子力協定が懸念されるインドにも、NPT 及び CTBT への加盟を強く促すべきです。

我が国には、被爆国として核兵器廃絶のリーダーシップをとる使命と責務があります。日本政府は朝鮮半島の非核化のために、国際社会と協力して北朝鮮の核兵器の完全な廃棄を強く求めていくべきです。また、日本国憲法の不戦と平和の理念にもとづき、非核三原則の法制化を実現し、「北東アジア非核兵器地帯」創設を真剣に検討すべきです。

長崎では、高齢の被爆者が心とからだの痛みにたえながら自らの体験を語り、若い世代は「微力だけど無力じゃない」を合言葉に、核兵器廃絶の署名を国連に届ける活動を続け、市民は平和案内人として被爆の跡地に立ち、その実相を伝えています。医療関係者は、生涯続く被爆者の健康問題に真摯に対応しています。

来年、私たちは広島市と協力して、世界の2,300を超える都市が加盟している平和市長会議の総会を長崎で開催します。世界の都市と結束して、2010年の NPT 再検討会議に向けて核兵器廃絶のアピール活動を展開していきます。国内の非核宣言自治体にも、長崎市が強く呼びかけて活動の輪を広げていきます。

核兵器の使用と戦争は、地球全体の環境をも破壊します。核兵器の廃絶なくして人類の未来はありません。世界のみなさん、若い世代や NGO のみなさん、核兵器に「NO！」の意志を明確に示そうではありませんか。

被爆から63年が流れ、被爆者は高齢化しています。日本政府には国内外の被爆者の実態に即した援護を急ぐよう重ねて要求します。

ここに原子爆弾で亡くなられた方々の御霊の平安を心から祈り、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くすことを宣言します。

2008年（平成20年）８月９日

8月8日、平和の灯

平和を願う灯で彩られた会場に
歌声が響きわたりました。

長崎の祈り
世界の願い

8月9日、平和祈念式典

63回目の夏、平和への祈りが、長崎
から世界に向けて発信されました。

写真の一部は長崎市広報公聴課提供

札幌市では、8月を「平和月間～平和の思いを未来へ育てる～」としており、平和に関するさまざまな事業が実施されました。

8月12日には、ピースネットで、追悼平和祈念館と札幌市役所をつないで継承部会の山脇佳朗さんが被爆体験を語りました。これは、「札幌市平和・子どものつどい」と題した催しの中で行われたもので、市役所では、市内の児童や市民の方々が山脇さんの講話に耳を傾けました。児童からは、学校などで平和について学んだ成果が発表され、最後に山脇さんから「平和について何ができるか考える大人になってください。」とメッセージが伝えられました。

また、8月16日には、永野悦子さんが札幌市教育文化会館で開催された「あの夏の記憶 ヒロシマ・ナガサキを忘れない」に招かれ、被爆体験講話を行いました。みなさん熱心に聞き入っていたようで、「平和の大切さ」と「核兵器廃絶への願い」が十分に伝わったのではないかと思います。

札幌市では、6月にも洞爺湖サミットに合わせて長崎・広島両市との共催で原爆展を開催し、吉田勝二さんが被爆体験講話を行うなど、非常に熱心に平和教育や啓発活動に取り組んでいます。協会としてもさまざまな面で協力して、平和への機運を盛り上げていきたいと思います。

遠くの都市から、近くの町まで…

長崎の願いが届いています

時津町では、63回目の8月9日を前に、8月4日から6日まで、写真資料調査部会の主催で、時津町などの後援のもと、時津町役場本庁舎の2階ロビーにて原爆写真展が開催されました。

この写真展は、時津町が平成6年に「核兵器廃絶平和の町宣言」を行ったことに続き、今年、恒久平和実現に努力することや核実験などが実施された場合、関係機関に反対の旨の意見を表明することなどを定めた「時津町核兵器廃絶平和推進の基本に関する条例」を制定したことを契機に、写真資料調査部会が時津町に呼びかけて実現したものです。

会場では、被災者の救護所や収容所となった旧時津村内の時津国民学校、時津警察署、青年クラブの写真を含む原爆被災写真、52枚が展示されました。

長崎市に隣接する時津町は被爆直後から多くの被災者を受け入れ、救援・救護にあたり、また、現在も町民に被爆体験者も多いことから、町民の写真展に対する関心も高く、熱心に写真を見学していました。

来場者に資料の説明をする深堀部会長

国連が創設された10月24日から1週間が国連軍縮週間と定められています。

協会では、今年も「市民のつどい」として、長崎市との共催で次のような行事を行います。

屋外イベント

平和、戦争、そして、未来を考える催しを行います。

日時 10月25日㈯10時～13時

場所 原爆資料館玄関下広場

催し 写真展・紙しばい・戦時食・環境にやさしい紙風船・折り鶴・綿菓子コーナーなどを予定しています。

屋内イベント

財団設立25周年記念プレイベント

「アジア青年平和交流事業の歩みと成果」

過去6回にわたり、アジア青年平和交流事業に参加した日本、韓国、マレーシアの若者をパネリストとして招き、交流の歩みと成果を検証します。

日時 10月25日㈯13時30分～16時

場所 追悼平和祈念館地下2階交流ラウンジ

※ いずれも参加は無料です。

第３回　被爆者健康講話
「チェルノブイリ事故から22年：世界のヒバクシャ」

８月７日㈭　追悼平和祈念館交流ラウンジ

今回の被爆者健康講話は、特別に長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）との合同事業として1986年に発生したチェルノブイリ原発事故で被ばくした現地の医学生を招き「チェルノブイリ事故から22年：世界のヒバクシャ」と題して、長崎大学医学部の高村教授のコーディネートのもと、シンポジウム形式で開催されました。

現在は、大学で医学生として研究を続けている、ゴメリ医科大学のカチャリーナ・ムンデェラワ氏、ベラルーシ大学のドミトリ・ベラルサウ氏、ドミトリ・ミフナベツ氏の３人がパネリストとして参加、自らの被ばく体験を語り、会場からの質問に答えました。

「数年前にベラルーシを訪問したが、都市部と地方の病院では、医療情報に相当な格差を感じた。もし、それが本当なら医療制度にもかなりの差が生じ、地方の患者は大変ではないのか。」との質問に対し、ドミトフ・ミフナベツ氏は「現在は、新しくできた医療センターなどで若い医者が経験を積み、全体検診のプロジェクトが構築されている。しかし、地方では十分な治療ができない時は、それなりの病院へ行くことになっている。長崎の被爆者は原爆ホームなど、幸せな生活ができるシステムがあることに驚いた。」、「元々は外科が専門だが、免疫についても論文などを書いて貢献したい。自分の国だけではなく、ヨーロッパや日本で学ぶことが大切だと思って勉強している。」と答えました。

また、ドミトリ・ベラルサウ氏は「ソ連が崩壊し、ベラルーシがロシアから独立した直後は、医療事情は良くなかった。最近でも、甲状腺がんが見つかっても、手術などは都市部の病院へということになる。」、「よい医者になりたいという希望があり、日本のような高い医療技術の国で勉強することに意義を持っている。自分は内分泌の専門医師になりたいと思っている。」などと話してくれました。

カチャリーナ・ムンデェラワ氏は「長崎では、被爆者に対して幸せな生活ができるようなシステムがあり、隅々まで行き届いていることに驚いた。」、「ベラルーシではこれから、20才代の若い被ばく者に甲状腺ガンなどが増えてくる可能性がある。」と驚きや危惧について語りました。

自らの経験を語るドミトリ・ミフナベツ氏

その後、３人の医学生から長崎の被爆者である継承部会の﨑田昭夫氏に、被爆直後の思いや、社会は被爆者に対してどのように対応してくれたかなどの質問がなされ、３人は﨑田氏の答えに真剣に聞き入っていました。

この３人の医大生は、22年前の原発事故により被ばくし、自ら甲状腺がんなどに蝕まれながらも、医学生として、被ばく者医療に貢献することを目指して勉学に励んでいます。

彼らには、被爆地長崎から最大限のエールを送って応援したいと思います。

これからの「被爆者健康講話」のお知らせ

第６回	11月６日㈭	薬の効き方（薬と食品の相互作用）	平良　文亨 先生
第７回	12月４日㈭	長生きの秘訣	新川　哲子 先生
第８回	１月８日㈭	「ジェネリック医薬品」をご存じですか？	平良　文亨 先生
第９回	２月５日㈭	認知症の予防	新川　哲子 先生
第10回	３月５日㈭	体重のコントロールのために：基礎代謝の話	高村　　昇 先生

TOPICS! へいわトピックス

碑巡りを開催

継承部会碑巡り班による被爆遺構・慰霊碑巡りが、７月27日におよそ30名が参加して開催されました。

継承部会の碑巡り班員をはじめ、平和案内人の有志の方々の説明のもと、「壊滅した電鉄大橋営業所」から「水を求め人々が飛び込んだ浦上川一帯」を経由し、「瓦礫と死体がちらばっていた城山住宅方面」へと２時間をかけて巡り歩き、当時に思いをはせるとともに、原爆の脅威と平和への思いを再認識しました。

なお、次回の開催予定は、以下のとおりです。

みなさんの参加をお待ちしています。

日　時

11月30日(日)　10：00～12：00　※小雨決行

集合場所

９時50分までに長崎歴史文化博物館前道路側広場に集合

コース

長崎県防空本部・立山防空壕跡
～非核非戦の碑の東本願寺
～本蓮寺方面

熱心に説明を聴く参加者たち

海外原爆展続報

今年で４回目を迎える海外原爆展は、アントワープ州市立平和センターで10月２日から12月12日まで開催します。

会場となる平和センターは、EU の情報センターも兼ねており、子供たちへの教育が盛んに行われています。原爆展では原爆の恐ろしさや平和の尊さを伝え、子供たちに自分の頭で考えてもらうため、継承部会長の松添博さんが渡欧し、自らの体験をお話しされます。

また、今回は松添さんが原爆をテーマに描いた絵画のうち、原爆展のために描き下ろしたものを含めて７点が会場に展示され、被災資料や写真パネルなどの展示物とともに世界の人々に原爆の惨禍やそれがもたらす悲劇を訴えます。

平和活動を支援します！

創始者の名前を冠した「秋月グラント」として、平和を願い、平和への想いを高める事業を行う団体や個人を対象に事業費の助成をしています。

今年度に実施する事業について、ただいま申し込みを受け付けていますので、お役立てください。

助成対象 平和を啓発するための活動を企画実施しようとする団体や個人

対象事業 被爆や戦争体験の継承、国際的な平和交流、平和意識の高揚などを目的とした事業

助成金額 事業に必要な経費の３／４以内の金額（上限額20万円）

申込期限 平成20年11月30日

詳しくは協会事務局にお尋ねください。

会員数報告

平成20年９月９日現在

◎維持会員　1,269名
◎賛助会員　170名
◎臨時会員　5名
◎学生会員　7名

寄付者紹介

ありがとうございます

◎小池　スイ　十万円
◎匿名　六千円
◎匿名　六千円
◎細田　喜輔　一万円
◎早川　恵美子　三千円

（敬称略）

会費納入のお願い

平和推進協会の活動はみなさまの会費に支えられています。

今年度まだ会費を納めていただいていない方は、何卒趣旨をご理解いただき、郵便局でお支払いくださいますようお願いします。

なお、振込用紙を紛失された方は、協会事務局までご連絡ください。

本紙は再生紙を使用しています。
平成二十年九月三十日発行
印刷　株式会社　昭和堂